



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「若者移行」の日本的性格をめぐって：三つの記録を中心に
Author(s)	坂元, 忠芳
Description	特集II シンポジウム
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 103, 241-254
Issue Date	2007-12-29
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.103.241
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/30347
Type	departmental bulletin paper
File Information	103_241-254.pdf



「若者移行」の日本的性格をめぐる

ドキュメント
—三つの記録を中心に—

坂 元 忠 芳*

A Discussion about the Japanese Character of “the Young Adult Shift”: —Mainly on Three Social Studies Documents —

Tadayoshi SAKAMOTO

はじめに

現代日本における「若者移行」の特徴を、「危機の教育学」を構成する諸概念——「危機」「危険」「液状の物象化」「切断」「連続化」「非形式的なネットワーク」「非形式的な学習」「参加」などをとおして考察するとき、そこに著しい特徴があることが感得される。

それは結論的に言えば、「ヨーヨー」型¹に典型的に見られる若者「移行」の「切断」と「連続化」の試みに一見似ているように見えて、実際はきわめて「移行」が困難な実情である。

そこには、「ヨーロッパ」型にみられる「移行」への「萌芽形態」があることが感じられる。けれども、この「萌芽形態」は、かならずしも現代日本における若者の「参加」と「移行」の確実な未来展望とつながっているようには見えない。というのも、その底辺には、あきらかに、バブル崩壊以後の我が国の「若者雇用」体制・政策の遅れと非柔軟性が見られるからである（白川一郎『日本のニート・世界のフリーター』中公新書ラクレ、2005、151-228）。

もともと、終身雇用制のもとで教育訓練を行っていた企業のOJTを中心としたシステムだけではやっていけない事態が、バブルのはじけた九十年代から広く起こりつつあったにもかかわらず、労働力を送る側にも教育訓練システムが十分に整備されず、対応が遅れているところへ、国際的にも低い若者雇用対策費によって、政府が公式に「若者雇用対策」を準備したのがようやく2004年からであったことがまず挙げられよう（同上、190-192）。そのうえ、非正規雇用が広がるなかで、ヨーロッパに比べて、パートタイム労働にたいする賃金を含めた条件が格別に悪いということがある。スペインを例外とすれば、正規雇用100%にたいして、非正規雇用の賃金格差は、日本が50%台で、他の多くのヨーロッパ諸国が、80%-70%台を示しているのとは大きな違いがある（同上、203）。

したがって、こうした我が国の状態は、2002年の若年人口に占めるニート（15～24歳）の比率が、一見、多くのヨーロッパ諸国に比べて、いわば平均的値を示しているにもかかわらず、決して同立には判断できないことを示している。もちろん、各国ともそれぞれの歴史的・社会的条件をともなあって、事態は推移していることはいうまでもない。²

* 東京都立大学名誉教授

そうしたことも反映して、我が国の若者雇用対策のうち、いわゆる「disadvantaged group 不利益層」にたいしても、十分な対応が不足している事態がある。なによりも、これらの層を特定することが難しく、たとえば、高校中退者や高校卒の無業者を特定することが難しいことがある。学校だけでなく、地方自治体がこれに当たるべきであるが、たとえば、現在全国に配置されているジョブ・カフェのように、窓口を設けて相談に来る人を待つというシステムでは、とうてい効果のある対策にはならない（同上、226）。

厚生労働省が2005年から実施をはじめた「若者自立塾」は、NPOによって取り組まれ、全国20カ所で35歳までの3ヶ月の合宿生活が組織化されているが、これについては、本稿では直接触れることはせず稿を改めたい。結論だけを仮説的に言っておくと、そこには、若者「移行」のいくつかの積極的な「萌芽形態」が見られるであろう。

本稿でむしろ筆者が考察対象にするのは、さしあたって、このような援助の実践形態ではなく、さきの「ヨーロッパ」型に見られる「個人化」のなかの「非形式的なネットワーク」の日本的性格とそれがはらむ可能性である。

この点でとりわけ興味深いのは、高卒一年目の「移行」選択を行った都内の若者を対象として、乾彰夫氏らがおこなったケース・スタディ『18歳の今を生きぬく』（青木書店、2006）である。そこで強調されているのは、我が国では、いまだに、「危険」に焦点を合わせた「若者支援対策」が、「公的空間」においておこなわれておらず、その「資源」の多くが、まだ「私的」に把握されるのに止まっているという事実である（同書、266-269）。

筆者が、さしあたって、教育学というよりも、社会学的ともいべき三つの記録に注目するのは、このような日本の性格を見据えながら、「個人化」の色彩を濃くしつつある我が国の「若者移行」が、どのようにして、「公的空間」の組織へと至るのか、その可能性をどう見るのかを考察するためである。

そこで、「脱物象化」された「非形式的なネットワーク」と「非形式的な学習」の発見は、この「私的空間」と「公的空間」との「境界」で発見されるに違いないという仮説のもとで、以下、考察を試みてみよう。

1 三つの社会学的記録について

さしあたってとりあげる記録は、

1) 小西二郎「仕事は好きなんです。でもやっぱ、友達と家族が一番すね——北海道小樽市の「ノンエリート」青年——」（『北海道大学大学院教育学研究紀要』第86号、2002、179-250）

2) 戸室健作「請負労働の世界を生きる若者たち」（『教育』2005年、4月号、46-52）

3) 阿部真大『搾取される若者たち——バイク便ライダーは見た！』集英社新書、2006

である。

いずれも、若い大学院学生の手になるもので、インタビューと参与観察である。小西氏の

ものは、卒業後さまざまな労働に従事している彼らにたいするインタビューを中心とした記録であるが、戸室氏と阿部氏のものは、院生としての勉学のかたわら、研究の対象として「請負労働」を選び、それに参加した記録である。

いずれも、若者の労働と生活を取りあげているので、登場者はニートではないが、ニートになる可能性をもって生活しているノンエリート層である。したがって、彼らは、いわば「生活防衛」として、さまざまな種類の「インフォーマルなネットワーク」を構成している。

小西氏が対象としたのは、北海道小樽市にある道立A工業高校造船科出身者たち（一クラス・全員男性、1992年3月卒業、11名）で、この記録は高校三年生から約十年間にわたる横断的調査の結果をもとに、事例分析をおこなったものである。

戸室氏が対象としたのは、東京都多摩地域の西野市にある大手電機企業「南北電機」の西野工場で、携帯電話器の最終組み立て・検査・梱包をおこなっている派遣労働者の生活である。

阿部氏が対象としたのは、東京都内にあるバイク運送業社で、時給ライダーと歩合ライダーとして運送に従事しながら、危険をつねに背負っているライダーたちの生活である。

登場する若者のキャリアの時間系列は、1) がもっとも長く、十年にわたるのにたいして、2) と3) は比較的短期間であるが、いずれも、団塊世代ジュニアといわれる若い世代の二極分化する一方の「不利益層」を追ったものと言える。したがって、これらの分析をとおして、若者「移行」の「切斷」と「連続」の性格が比較論的に取り上げられる。

扱うケースが極めて少数であることを前提として、「若者」が従事する労働との関連で、「非形式的なネットワーク」と「非形式的な学習」にたいする教育学的批評を試みてみよう。

2 小樽市のノンエリート青年の場合

小西氏は、インタビューにあたって、明確に言語化されない被験者たちの状況認識をつとめて取り上げるが、それは「対話に関する解釈的方法」にはかならない（前記、報告書、182）。

たとえば、「友人ネットワーク」と小西氏が呼ぶ関係について聞き取る場合をあげてみよう。飲料・食品・雑貨輸送に従事している「若者13」（28歳？）と、化学機械や産業機械などの製作に従事している「若者26」（28歳？）にたいして、つぎのような対話がおこなわれる。

若者13 おんなじことやるにしても、あっち（注：友人のこと）は遠回りするタイプ、俺、こっちは近道するタイプ。そう言う感じ。

（中略）

小西 ぶつかって、お互いに「いやあ、俺の方がいいんだ」とはならない訳ですか？

若者13 あ、そう、そういうのはない。

（中略）

若者26 ぼくはこう何でも悩むタイプなんですけど、彼は何でも行動しないとダメだって言うんですよね、ぼくに。

小西 ほおー。どっちかったらあれっすか、あの一、背中押してくれる？

若者26 うん。

これは、「友人ネットワーク」の微妙な性格を聞き取る場面の断片であるが、このような「対話的インタビュー」が、一方に引きずられない彼らの友人関係の「自主性」の特徴を引き出すためにおこなわれるわけである。

さて、報告書は、1) 対象地である小樽の概況と対象者のライフコース、2) 対象者の友人関係、3) 対象者の労働、とりわけ労働にたいする志向性 4) 対象者の生き方にたいする考え、にかんする調査・考察からなりたっている。

彼らは、全体として、ノンエリート家族の出身で、情報系専門学校に進学した「若者6」を除くと、全員がA校卒業後に就労している(186, 表2)。抽出した11名のうち、現在千葉市と札幌市で一人暮らしをしているほか、残りの9名は、小樽と余市に住んでいる。既婚者は3名で、みんな親から独立している(「若者18」(27歳)「若者37」(28歳?)「若者38」(27歳))。未婚の6名のうち、5名は実家に住んでいる。

現在の仕事は、つぎのとおりである。実家が経営している食堂で働いている「若者5」、理容店に勤めている「若者37」を除くと、残りの6名(「若者12」「若者13」「若者15」「若者18」「若者26」「若者38」)は、ブルーカラー労働に従い、3名(「若者1」「若者3」「若者6」)はホワイトカラー労働に従っている。

ブルーカラー労働は、さきの「若者」に見られるように、運送や機械製作、さらには、外装・内装、石油スタンド勤務などである。

ホワイトカラー労働について言えば、「若者6」がシステム設計のプログラマーであるが、彼が属しているのは、従業員が30名の事実上は派遣会社である。また、「若者1」は、A工時代、成績はトップで、総合重機業界大手のM造船に就職したが、すぐにその子会社に出向となり、その後、岡山県の事業所への配転が決まった。「若者3」は札幌駅営業係の出札である。

彼らの現在の所得は全体として低い。年収は300万-400万といつてよい。

報告書を通読すれば、彼らの労働経験の主要な特徴が浮かびあがってこよう。

彼らの卒業は先にもふれたように、1992年3月であり、すでにバブル崩壊後ではあったが、道内でも労働力需要は衰えておらず、「若者6」を除いて、ひとまず全員が就職できた。けれども、札幌のSソフトウェア専門学校の情報システム科に進学した「若者6」だけは、二年後の1994年には、高校卒業者とのタイムラグがすでにできていて、すぐには就職できず、失業期間は通算して15ヶ月にも及んだ(同上、218-219)。

けれども、彼らの多くがその後、退社や転社を余儀なくされた。11名中、6名(「若者5」「若者6」「若者15」「若者37」「若者12」「若者13」「若者18」)がそうである。彼らのうち、非熟練ブルーカラーである外装・内装、飲料・食品・雑貨卸業販売係、札幌石油スタンド勤務に従事する「若者」たち(12、13、18)は、三回以上も転社している。

これらのケースについては、報告書に詳しく書かれているので、それらを参照されたいが(同上、221-223)、あきらかに、リストラや規制緩和や怪我や長時間労働による疲労などが主な原因となっている。そこには、グローバリゼーション下における企業社会の縮小と再編があきらかに反映している(同上、218)。

たとえば、「若者18」について言うと、彼は、道内でも有数の石油ディーラーであるST社に入社した。岩見沢営業所で整備の仕事をしていたが、長時間労働の疲労で一年後に辞めた。

冬は車検が集中して、毎日、退社は早くても、10時や11時であった。「寮へ帰って雪投げ（除雪）して、寝て、朝起きると、また雪投げして、また会社へいく」仕事が続いたが、もう体がもたなかった（同上、222）。94年2月には、5社目にあたるH社で働くようになり、小樽市内のサービス・ステーションで、アルバイトをすることになった。仕事内容は正社員となにも変わるところはなかった。けれども、94年4月いっばいで、解雇された。非正規雇用者であったので、まっさきに人員整理の対象となったのである。

石油ディーラー界における規制緩和がきっかけであった。

それから、彼は父親の勤めるM木材で、配達作業をおこなうアルバイトをし、96年にA運送会社に正社員で勤めることになった。4トントラックで段ボールを配達することが仕事であったが、9月頃、工作中に誤って、段ボールを左足の甲の上に落とし、剥離骨折してしまった。会社側は労災認定の手続きを直に取り、彼の会社復帰を望んだ。しかし、彼は会社に迷惑をかけるわけにはいかないと退社した。怪我が治って、S商事のガソリンスタンドでアルバイトを始めたとき、今の会社O石油から声がかかり、97年4月に転社したのである（同上、222）。

労働の「志向性」についての調査から分かるのは、彼らの多くが、安い給料や長時間労働の常態化にたいして、強い不満をもっているにもかかわらず、仕事そのものは好きだと言い、「働く」ことにたいして、「適当にはやらない」と言っていることである（同上、227）。仕事が楽しければよいのであり、たとえば、さきの「若者18」などは、サービス・ステーションの所長が退職して、管理職になることを勧められても、関心をまったく示さず、また、「若者12」のように、内装と外装の仕事をトータルに考えて、自分の技能形成に上限はないと考えている（同上、231-232）。

労働条件や技術・技能の向上を果たしながら、同時に、職業志向を実現するにはどうするかについては、「若者6」「若者26」「若者38」は、転社を考えている。

たとえば、最初にあげた、化学機械や産業機械などの製作に従事している「若者26」は、道立高等技術専門学院の指導員に転職する道も視野にいれて、溶接の技術を磨いていこうとしている（同上）。

全体として、彼らには、ノンエリートとしての「落ちこぼれ意識」や「負け犬」意識を抱かせるところはなく、金銭にたいする欲望も、それほど強いとは思われない（同上、238）。このことは、さきの「若者18」の場合、とくに強いように思われる。「これからどんな生き方をしたいか」という問いにたいして、

若者18 「金ばっかしあったって面白くないからね。全部みっかって、ね、充実してしまえば、次も見えてこないし、頑張ろうっていう。そういう・・・が、

小西 あ、充実しちゃったならば、

若者18 そうそう。もう、そっから、もうちょっと頑張っていること覚えたいなあとか、そういう気持ちもなくなっちゃうかもしれないし。（傍点筆者）

ここで言うことは、結局、労働条件や技術・技能にたいする欲求や希望が、たび重なる転社にもかかわらず、まったくなくなっていないことであろう。このことは、小西氏が示唆するように（同上、238-239）、彼らをめぐる「友人関係」や家庭が保っているある種の

安定性の持続からくるのだろうか。（もちろん、独身の若者の多くが実家から通っているという、「南ヨーロッパ型」³と似た現象がそれを支えているように見えるのであるが。）

この点から言って、報告書は、「友人ネットワーク」について、興味深い考察を示している。

ちなみに、11名のうち、既婚者は、3名であり、「若者18」「若者27」（理容師）「若者38」（車の整備）である。

報告書は、まず友人に着目しているが、彼らは、「会社人間」ではなく、「友人との付き合い」をきわめて重視している。特徴的なことは、彼らの「プライベートな関係」が、単純に「友人 vs 家族」という二項対立的な関係ではないことである。（もちろん、妻も夫も友人とつきあうが、結婚後には、家族へと内閉化する傾向にある。）

たとえば、高校時代の友人関係は縮小傾向にあるが、それでも、気の合う友人とつきあいが続いており、既婚者の三名はみんな結婚後も家族ぐるみで付き合いを続けている（同上、196）。また、結婚予定の「若者13」も、気の合う親しい友人と、双方の恋人を交えた恋人ぐるみの付き合いをしている（201）。いっしょにすることは、「カラオケ」「酒」「スノーボード」などである。この「ぐるみ」的付き合いのイニシアティブを握るのは、これまでのところ男性である。

「友人関係ネットワーク」の特徴は、おそらく「若者」の「個人化」を反映して、そこでの「関係の切り結び」や「相互行為の内容決定」が、比較的フレキシブルなことである。つまり、付き合う時や場所、それから、一緒にやることの選択や決定の自由度が高いということである（同上、203）。ちなみに、彼らは、一年に三回以上会っており、多い場合、週に一回強、少ない場合でも、二ヶ月に一回ほどのペースである。彼らの何人かは、硬式テニスや山登りやドライブやゴルフなどの趣味を共有している（同上）。

これらの趣味は、小西氏の表現を借りれば、「楽しみ以上のもの」となっている（同上、204）。趣味をととしての「文化的事物の使用」や「加工をとともなう行為」は「享受」そのものであると同時に、人と人を取り結ぶ「媒介的行為」でもある。筆者のことはで言えば、それはある種の「消費」ではあるが、そのなかに、創造的媒介行為が含まれている。たとえば、「若者」が集まるカラオケでは、歌を歌うとともに、仕事の話もすれば、政治の話もする。たとえば、選挙に誰を入れるという話もするし、ある場合には、老後の話さえする（同上、204-206）。

けれども、小西氏は、この「友人ネットワーク」における話の話題を突き詰めていこうとすると、彼らの会話が、最後には、小西氏の要求することとなんとなく食い違ってしまいうことに気がつき、そのことに注目している（同上、207）。つまり、楽しい話し合いで重要なのは、その時話される話題ではなくて、むしろ、話し合いをしていることそのものが重要なのだということである。小西氏は、こうした関係の「作法のありかた」の特性を、彼らが保持している「友人ネットワーク」の「場」としての格別の意味として表現している。つまり、彼らは、年齢が離れていても、「対等な付き合い」をしようとして、気を遣い、気を遣いながら、そのことに価値を置いている。たとえば、先輩は後輩にはとくに気を遣うと言う（同上、207）。卑近な例でいえば、先輩が「ジュースを買ってきてくれ」と後輩に言うのではなくて、「一緒に買いに行こう」と言う作法である。後輩からの相談でも、それにたいして、たんなる「忠告」や「助言」でなく、相手の持ち味を考慮したうえで、相手の「自立性」を尊重し、喚起

するような励ましが行われる。この節のはじめに紹介した「若者13」と「若者26」の言説も、こうした「場」の例示にはほかならなかった。

つまり、そこでは、ノンエリート青年のあいだを行き交う「友人ネットワーク」は、若者がもっとも「危険」に陥りやすいところに入り込んで、「被保護者」としての「疑似家族的」安心感・安定感を意識的に作るように見える。ここには、「若者期」が含む一つの流動的性格を認め、「ヨーヨー」型と似たジグザグの逆方向が含まれているようにさえ見える。

けれども、ここで指摘しなければならないのは、ワルサーの言う「拡張された擬似家族的ネットワーク」が、「液状化」した労働の「脱物象化」の方向を含んで主張されていたことである。それは、西ドイツにおける労働再構成のワークショップ構造について言われた事態であり、その意味では、小樽市のノンエリート青年の言説は、なによりも、労働の外側における文化活動でのそれであることが指摘されよう。したがって、この領域での「友人的ネットワーク」は、たんなる「消費」を越えるように見えて、まだ本質的には、青年が位置する労働現場の「脱物象化」にはいたってはいないと思われる。「非形式的なネットワーク」も「非形式的な学習」も、実際には、生活のすべての領域を覆うことはきわめて難しく、したがって、「若者」の参加が周辺にとどまることは普通に見られることであるが、たとえば、管理職につくことを断った「若者18」の場合、「俺の全部を受けて話せ聞いてくれる友人」（傍点筆者）の言説には、おそらく、職場の低賃金や労働条件についての不満が直接含まれているわけではない（同上、206、表15）。この言説が含む内容は私的領域に属しており、したがって、小西氏の結論づけるように、まだ「職業志向」と「友人ネットワーク」での付き合いとの「境界」の「連続」には至っていないと思われる。その意味では、「若者18」のガソリンスタンド労働というまでもなく、「若者26」の溶接労働さえも、液状化した「テクノ資本主義」のそれに達していないことが、その根底にあると言えるかもしれない。そこでは、「危険」も「危機」も、「液状化」した形で、まだ私生活のなかに始終流入するには至っていないように見える。いや、不安定な長時間労働の形で、流入し始めているにもかかわらず、「友人ネットワーク」のなかでは、その形は、さきの言述に見られるように、内在的かつ自覚的には扱われていない。したがって、労働条件や技術・技能にたいする彼らの期待と希望も、さきの「安心」の言述のうえに位置しているように見えて、実はまだそこまで十分に貫徹されていないのではないか。そこでは、「職業志向」と「友人ネットワーク」での付き合いとの関係は、まだ情動的・感情的未分化状態にあると判断されよう。そこには、「連続」があるように見えて、おおきな「切断」がある。

ところで、このような「未分化」を含んだ「切断」は、いっそう不安定な派遣労働者の場合には、どのように現れるのだろうか。

3 多摩・西野市の派遣労働者の場合

戸室氏の行った調査は、東京多摩地区にある大手電気産業「南北電機」の量産組み立て工場（正社員数640名）での三ヶ月半にわたる派遣労働での自己体験を記述したものである。

この工場では、通信システムの開発・製造をおこなっている。戸室氏が参加したのは、ケイタイの最終組み立て・検査・梱包である。この現場では、正社員数29名と請負労働者320名（多い時には548名）が作業に従事している。

請負労働者の多くは、20代で、35歳以上はほとんどいない。昼勤と夜勤とがあり、昼勤で働く請負労働者の四割ほどが女性である。夜勤に女性は少ないと言う。

作業場では、六社の派遣企業から請け負い労働者を受け入れている。

作業は、8:15からはじめて、12:00-12:55（昼休み）、13:00-16:55までで、残業は、19:00までである。基本的には8時間労働である。

すべての作業は、若者が、生産ラインにお互いに向かいあって並び、作業台に張り付いて、突っ立ったままおこなう作業で、五日もあればほとんどの人間が習得できる単純作業である。

請負労働者は、すべて有期雇用である。請負労働を続けている者は、たえず、一ヶ月一ヶ月の雇用契約を繰り返している。

請負労働者の賃金は、継続的に下落している。日給では、9000円（2001年夏）⇒8800円⇒8400円（2002年春）⇒8200円（2002年夏）⇒8050円（2003年6月）となっており、この二年で一割以上も下落している。

戸室氏がここで請負労働をした期間は、2002年の春から秋にかけてのようである。大学の休み期間もあって、請負労働者の約三分の一が学生アルバイトであった。彼らはアルバイトが終わると、雇用契約の更新はせず、学校がはじまれば辞めてしまう。それ以外の一般請負労働者は、短期の雇用契約を更新しながら、働く。

戸室氏の調査は、まず、どのような経路をへて、請負労働にたどり着いたかに向けられる。前職まで正規労働についていた人とフリーター職しか経験しなかった人とを分けて、戸室氏は、「正社員型」と「フリーター型」と名づけ、「フリーター型」のほうが多いという。

戸室氏の面接——というよりも、おそらく働く仲間として聞き込んだところでは、「正社員型」は、以前に勤めていた企業での長時間労働または良くない人間関係のために退職せざるを得なかった点が特徴的であると言う。たとえば、北島さんという女性（29歳）は、大学卒業後、大手広告代理店の下請け企業に事務職として入社したが、デザインの仕事に突然変えられ、まったく研修も行われず、いきなりコンピュータで画像をつくらされた。長時間労働が続く、泊まり込みが長くなって、椅子に横たわって眠ることに慣れてしまい、自分の家の布団で寝るといつもの感覚と違うので、かえって眠れなくなってしまうこともあった。ストレスがたまり、親も心配して、2002年には、退職した。それ以来、請負企業に登録されて、2003年3月から、西野工場で働いていると言う。給料は正社員だった時よりも、むしろ今のほうが多いと言う。（この女性の住居は記述からは明らかでないが、おそらく実家から通っている様子である。）

これにたいして、「フリーター型」の前職は、多種多様である。戸室氏が聞いたものを挙げると、西野工場での請負労働・期間労働、引越し業、新聞配達、スーパーやレストランや、酒屋や本屋やパチンコ店でのバイト、風俗店での労働、バーテンのシェーカー、ビルの外装作業などである。

戸室氏がこれらの不利な条件で働いていた前歴をとおして確認している重要なことは、つぎの点である。すなわち、不熟練労働に従事していた「若者」たちが、不安定で低賃金の条件で働いていたなかで、西野工場の請負条件が比較的によく、ここに長期にとどまろうというインセンティブが、彼らのなかに働いているという事実である。けれども、こうした単調な労働に毎日を過ごすのは、別の意味では、たまたなくいやなことである。2002年9月のある日、仕事を終えた浜さん（男性、26歳）は、戸室氏と一緒に仕事を終えて帰りながら、「論

文の構想を練って一日を過ごすのと、今日も 650 個作んなくっちゃと思って一日を過ごすのとは、生きる気力がぜんぜん違うだろう？」と言う。

たとえ、西野工場の請負労働の仕事を辞めたからといって、不安定がなくなるわけではない。彼らの多くは、多摩地区の自動車工場やプリンター製造工場や南北電機の下請企業を紹介されて、そこで請負労働を行っている。警備員、大工、ヘルパー、キャバクラ嬢、工事の現場監督、アパレル店やペルー家具店の店員など、都市の雑業の仕事に従事している。

戸室氏の考察のなかで重要なのは、こうした請負労働の不安定さと関連して、彼らのなかにどのような「友人ネットワーク」が作られ、それがどのように請負労働の安定を図るようにして働いているかということである。

さきの小樽市のノンエリートの青年の場合と比較して、どんな特徴が見られるかという点にしばって考察してみよう。

一般請負労働者と学生請負労働者とのあいだには、当然のことながら、違いがある。学生請負労働者が個人でばらばらか、小さな集団で付き合っているのと違って、一般請負労働者は、小さなグループを作っている。戸室氏の観察したところでは、2002 年春休みに出会った 8 人グループは、いつも昼休みには、工場近くの公園でバスケットボールを楽しんでいた。彼らは、仕事が終わると、近くのコンビニに寄って、ビールやサワー、おつまみを買って、豊山駅まで歩いて帰っていた。

このような付き合いを、「非形式的なネットワーク」と呼んでいいかどうかはともかくとして、それが比較的短期のつながりとなり、多様な文化的活動を行っていることは事実である。先の八人の集団は、山登りをしたり、花見をしたり、ときにはメンバーの一人のバンドのライブも行う。彼らは、戸室氏が辞めるときも、居酒屋で送別会までしてくれた。このようなグループはそのほかにもいくつかあるようだが、それぞれのグループが対立しているわけではない。お互いにオープンであり、交流されている。

戸室氏は、請負労働者の交流では、自らの近況や将来についての悩みをはじめもろもろのことが語られ、どこそこの職場は血尿が出るほどひどい職場だったという「危険」情報も語られていると言う。

けれども、最後に、戸室氏は、そうした「ネットワーク」が、参加する人々の「心の支え」に留まっているのが、現状であると結論づけている。彼らは労働者の権利や労働組合などについての知識をほとんどもっていないとも結論づけている。

このような現状は、派遣労働者の「労働様態」と「非形式的なネットワーク」が、小樽市のノンエリート青年の場合よりも、いっそう、さきの「切断」をはっきりと見せている姿だと言える。しかも、それらが「労働様態」のいわば外側で形成され維持されているのは、それでも西野工場の請負労働が、他と比べて比較的ましであるからにはかならない。

小樽市の青年の場合の構造と違うのは、出身地も出身校もまったく違い、おそらく、「ネットワーク」の定着性も非常に基盤が弱いと思われる点である。したがって、その交流の形はいっそう流動的であることが予想されるが、それでも、「ネットワーク」が存在するのは、この職場で、請負労働者が一定期間定着できているからである。西野工場の労働がまったく単純手作業⁴であること、しかも、この単純作業が時間制であることが、このような「ネットワーク」を成立させている基盤であろう。

したがって、小樽市のノンエリート青年の場合よりも、ここでの「切断」はいっそう明示的であり、情動的・感情的関係は、労働様態とは分化して、「個人化」された内面に表層的に入り込んでいるものと見られる。「友人ネットワーク」がほとんど趣味的になっているように見えるのもそのためである。

けれども、それは、労働が「請負制」となり、いっそう「流動的・液状的」⁵になるばかりでなく、労働そのものが「擬似的趣味」の形をとる「バイク便」の場合に比べれば、はるかに非強迫的である。

4 都内の「バイク便」に従う若者の場合

阿部真大氏が、自身の参与観察で仮説としている事実を紹介することからはじめよう。

それは、「バイク便」が、阿部氏によって、請負労働者や委託労働者の「極限型」として、選ばれていることである（阿部真大『搾取される若者たち』集英社新書、2006、22）。

阿部氏は、バウマンにしたがって、「バイク便」が、収入の不安定性と身体の危険性によって、極度に不安定であるにもかかわらず、「ワーカホリック」（働き中毒）となることを指摘する（同上、16-20）。

バイク便企業が最初に発足したのは1892年である（同上、25）。急成長をはじめたのは、八十年代の後半からである。

バイク便ライダーの一日は、つぎのようにしてはじまる。

彼は装備して自宅を出る前に、会社に電話し、待機場所への到着時刻を伝える。待機場所につくと、仕事が与えられるまで待機する。仕事の指示は、ケイタイでなされる。ライダーは、メモ帳に、配達の種類、荷受先、荷届け先、注意事項を記入する。配達には配達時間と料金によって、いくつかの種類がある。受け取って荷届け先にそのまま向かうのが「クイック便」であり、いくつかの荷受け先を回ってから荷届け先に向かうのが「メール便」である（同上、33）。一日の配達がおわると、会社に終了報告をする。伝票の精算を終え、自宅に戻る。フルタイムで働く「バイク便」の労働時間は、一日あたり10時間から15時間くらいである（同上、34）。

「バイク便ライダー」には、二種類がある。「時給ライダー」と「歩合ライダー」である（38-42）。

「時給ライダー」は、時間給だから、制限速度の範囲内であっても、急いでバイクのスピードをあげる必要はなく、まして、いわゆる渋滞のなかで車と車、車と歩道のあいだを「すり抜け」する必要もない。ところが、「歩合ライダー」のほうは、あらゆる危険をおかして、ぎりぎりスピードをあげ、「すり抜け」をやって成績をあげていく。その結果、ミリオンライダーがうまれる。一ヶ月100万円売り上げで、歩合は40%-50%であるから、月に40万をかせぐことになる。

「時給ライダー」の時給は約1100円だから、一ヶ月に40万をかせぐには、週休一日で、一日平均、15時間働かななくてはならないが、それは不可能である。

ところが、ミリオンライダーは、収入の面だけでなく、趣味の面でもライダーたちの目標とされる点が、阿部氏によって取り上げられる。その意味で、「歩合ライダー」は、収入と趣味とが完全に混じりあってくる。これにたいして、「時給ライダー」は収入と趣味が分離

している。そのことをよく示すのは、夜番のときである。彼らは、長い待機時間のときに、笑い話をしたり、弁当をたべたり、ときには深夜の町をスピード競争する。彼らの乗るバイクは、趣味的の高い大排気量のバイクである。

ところが、「歩合ライダー」で熟練してくると、「すり抜け」を徹底的にやるために、寄ってくるタクシーを追い越すことが主要なテクニックとなる。

すり抜けの自慢をしながら、阿部氏は、一番忙しい12月に、つぎのような会話を、仲間としている。

僕 リード、どうっすか？

I 社バイだけど、いいね。やっぱ都内はスクーターだね、すり抜けが命だから

僕 確かに。特にこの時期（十二月）は

I そうそう。あんまり速いだけの乗っても仕方ないからね

僕 にしても、タクシー、こわいっすよね！

I 後ろから、頭を見てればいい。客見つけると、運転手の頭が左に揺れるから。それで見分けるんすよ。（同上、57）

「歩合ライダー」たちは、そのうえ、仕事のかっこよさに「機能性」という価値を組み込んでいく。素人の筆者にはここまでくるとよく分からないが、彼らは、つぎつぎと車体が細く「すり抜け」に有利なモタード・タイプのものに変えていく（64）。こうして、彼らはいくつもの「機能性」によって、つぎつぎと「仕事による趣味の更新」をし遂げていく（75）。バイクのかっこよさは、「歩合ライダー」の美意識へとつながっていくのである（75）。

阿部氏は、あるライダーの変化を子細に追いながら、休日も出勤していくようになる様子を描いている。この若者は、もともと、バイクに興味をもっていた。「歩合ライダー」になるまえには、彼には、仕事とは別なバイクの私的世界があった。たとえば、休日での北海道へのツーリングがそうであった。けれども、ワーカホリックが彼をとらえてからは、死が口を開けてまつようになる（86-87）。

バイク便ライダーのなかには、サーキットライダーを兼任しているものも多い。そうしたライダーの一人が、サーキットで死亡事故を起こしたために、安全運転を心がけるようにと、社内報に掲載されたことがあった。けれども、阿部氏は、「安全運転に心がけてもらいたい」というこのメッセージが内包する危険性になによりも注目する。それは、多くの「バイク便ライダー」によって見逃されている危険性であるが、「サーキットライダーの死亡事故」が、「バイク便ライダーの死亡事故」と同列にとらえられてしまっているという事実である（92）。ここには、自己が趣味として選ぶスポーツにおける安全保持およびその基盤としての健康・体力保持と、派遣労働における安全保持およびその基盤としての健康・体力保持との完全な混同がある。

この混同は、バウマンによって指摘された、あの「消費社会」における「体力」概念の行き着く姿にほかならない。

こうして、「バイク便ライダー」のワーカホリックが、「好きなことで死ぬ」というヒーロイックな物語をともなって意味づけられる。その根底には、現代における我が国での「液状

的物象化」を象徴する労働形態が、ほとんど悲劇的に描かれている。それは、「労働災害」の意識をも「物象化」させて、「疲れれば疲れる」ほど「気持ちいい!」という感情と情動とを増幅させていくまさに事態である。阿部氏は、雨の日の夜など、くたくたになって、仲間の一人が、昭和通りの新橋から銀座のアンダーパスの連続している場所を走りながら、彼につきのように言うところを紹介している。——「ボーっとしたところが気持ちいいんだよ。スピードは上げるんだよ。神経だけ研ぎ澄まされて。セナが言ってたろ、神が見えたって。そんな感じ。」(91-92)と。

これは、「ライダーズ・ハイ」と呼ばれる軽い躁状態であり、若者のこの言述は、「私的領域」での自己感情と「公的領域」(労働現場)での自己感情との「危機」のなかで、両者が完全に混同されていることを示す(93)。ここでは、バウマンのいう「消費社会」の労働と消費の「一体化」とその中毒⁶が、危機的感情のなかに「瞬間化」されているのが見てとれる。

そのうえ、阿部氏は、こうした意識のいわば「液状的物象化」が、職場のいくつかの「トリック」で、日常的に合理化される過程を指摘している。それは、「バイク便」に仕事を割り振る「配車係」を「頼れるコーチ」と感じさせる雰囲気醸成、それから、「バイク便」の会社毎の「ユニフォーム」で演技化させる仕組みである。

こうして、彼らは、路上でヒーローのような気持ちにさえなる。派遣労働という「負け組」の感情は、レストランでぬくぬくと食事をとっている同年配の「勝ち組」サラリーマンに届け物をするときには、かくべつ強く意識されるけれども、「俺らは、路上でバイク便ライダーを演じる」ことで、「あいつら」を見返すことができるのだ!と考える(106-109)。彼らの演技の舞台は、自分たちの演技が最高にできる「赤坂コーナー」であり「電通サーキット」である。彼らのスローガンは、自分たちの演技で「東京を塗り替えろ!」である(112)。

いっそう危険なことは、このような職場のトリックに、さらに、会社の「安全雇用」という言述が付け加わることである。

「これをしていれば死ぬまで食っていける」というフレーズは、四〇歳や五〇歳にもなって、元気に走っているライダーを見ていると、若者たちは、そのとおりだと思ってしまう(120)。

阿部氏は、「軽い高揚感がいつまでも続く」ように夢想させる職場には、「時間軸が消失している」と言う。けれども、これこそ、バウマンが「瞬間性」をつねに志向すると述べた現代における労働と生活の「液状的物象化」ではないか。

阿部氏は、自分の参与体験をとおして、以上のような「トリック」を明らかにしていくが、そこで決定的なのは、彼をも含めて、この世代が、まさに「競争世代の団塊ジュニア」であったことを告白しているところであろう。「未来もないのに競争で追まくられた世代」という自己認識が、阿部氏をして、以上のような「好戦的誘惑」を、ネオリベラリズムの時代に受け入れる基盤であったと告白させており、「団塊ジュニア以降、若者たちは、より好戦的にワーカホリックな方向に進みつつある」と、阿部氏は警告する(139)。

結論として、阿部氏は、問題を「ネオリベラリズム的競争原理」の問題としてとらえるのではなくて、「労働者の権利」としてとらえるべきだと宣言する。この宣言は、以上の三つの社会学的記録における構造の行方を明らかにしていると言えよう。

それは、「競争原理」の時間と空間における「強迫的」生活リズムにたいする抑制的「介入」の宣言にほかならない。現代における「若者移行」は、このような具体的体制を「危機」と「危

陰」の真に具体的な記録をとおして、明らかにしなければならない。

5 おわりに—中間総括にかえて—

以上、日本の「若者」調査の三つの記録から、^{ドキュメント}見えてくるものは、我が国でほとんど習慣化された、「若者移行」の時間と空間とが含む「私的」構造であろう。

それは、一見具体的な姿をとっているために、職場における労働条件をはじめ人間関係の「物象化」された状況から「切断」されて現象しており、人間性快復的な性格、すなわち、通俗的に言えば、「ケア」的性格を保持しているように見える。

小樽市のノンエリート青年は、「公的空間」である労働現場に多くの不満をもちながらも、もう一つ、別の「私的空間」をその外側に作ろうとしていた。しかも、「公的空間」そのものが規制緩和によってはげしく「私的空間化」されつつあるにもかかわらず、その荒波に漂いながら、「私的空間」としての「友人ネットワーク」では、「疑似家族的ネットワーク」をつくりつつあることが分析された。そのなかでは、情動や感情についての安心の「場」とも言うべきものがつくられつつあることが明らかにされた。けれども、それは、「公的空間」としての職場と「個人化」した個人とのあいだの「境界」を「連続」させるというよりも、職場から「切断」された空間のなかにもっぱら作りだされており、それらの場は、職場空間への希望・期待を言述によって主観的に含む「私的空間」に留まっていたように思われる。それは、労働空間での不満を和らげていたとはいえ、その不満を「脱物象化」する職場空間からの「文化的距離」を含んではいなかったのではないか。

こうした「非形式的なネットワーク」の私的日本的性格は、西野市の派遣労働においても、基本的に保持されていた。けれども、この派遣労働の職場では、「私的空間」は、労働力の流動的状況のなかで、労働条件に比較的恵まれた状況のもとで存在していた。したがって、このような空間におけるネットワークが、小樽市のノンエリートの青年の場合よりもいっそう不安定であり、それは、何時崩壊するか分からないような状況を予感させていた。したがって、職場空間とはいっそう「切断」されているようにみえて、その「距離感覚」においては、職場の条件と接近する可能性をはらんでいることを示唆していた。

第三のバイク便の事例は、現代の「液状の物象化」が、その労働領域にもっとも典型的に現れたそれであるが、それは、労働という公的空間の「物象化」がそのまま生活全体に及ぶという「危機」と「危険」を示していた。そこでは、グローバリゼーションの競争原理が、「液状的」に労働にも消費にも浸透している姿として示された。しかも、このような労働様態は、「バイク便」だけでなく、いっそう、多くの労働分野に現れることが示唆された。というのも、労働の趣味的性格は、正規雇用はいうまでもなく、非正規雇用にも広がる可能性が「テクノ資本主義」にはあるからである。阿部氏の言うように、不安定就業でのワーカホリックの可能性は、感情労働に携わる「ケアワーカー」や、フリーのシステム・エンジニアにも当てはまるからである（同上、28-29）。

したがって、「物象化」を「脱物象化」する「ネットワーク」を、さきに述べた「境界」に「連続」させるには、「若者移行」における「日常的安全性」をシステムとして公的に作り出すものでなければならない。そのためには、移行の「ヨーロッパ」型が強調する「無条件の基礎所得」（バウマン）⁷が確保されることがなによりも必要であるが、問題なのは、その

確保の具体的形態である。

いうまでもなく、それはグローバリゼーションがつくり出すシステム、言ってみればネオリベラリズムに動かされるハードな体制にたいする「公的介入」や「公的規制」にはかならない。けれども、それはかつてのように、最低労働時間や最低賃金の一律的決定だけでは不可能であろう。したがって、その構造は、「液状の物象化」がはらむ「危険」や「危機」にたいする適切な「介入」を常備するシステムと、それを行為する主体agentとの創造にはかならない、という困難性を負っている。

したがって、この方策は、社会学だけでなく、政治学や教育学をはじめ、「危機管理」を対象とした、あらゆる学問によるシステムの創造と主体保護の論理を含んで成立するであろう。

1 「ニート問題と若者支援の基本構造について——EGRISの「YOYO」モデル型を中心に——」(2006.12.24報告)

2 白川一郎氏がOECDのデータベースをもとにして作成したものによれば、2002年の若年人口に占めるニート(15～24歳)の比率は、フランス8.9、ドイツ10.3、イタリア17.9、日本9.5、オランダ6.3、カナダ10.2、ニュージーランド20.5、英国11.9、アメリカ11.4、OECD平均15.1となっている(白川一郎、前掲書、224)。これで見ると、ニュージーランドとイタリアを除いて、各国とも、一割前後を示しているが、その歴史的・文化的特徴を調べていくと、多様性が浮かびあってくる。

そのいくつかをエピソード的に拾ってみると、イギリスでは、1998年には、16歳から18歳の無業者が、約161000人(約9%)とされ、ブレア首相は、その理由は何かを分析し、劇的にその数を減らす計画を立案しなければならないと演説して、ニート対策が本格化したにもかかわらず、スコットランドでは、2003年度には、15歳から19歳までのニートは、英国全体の9.6%にたいして11%と、OECDのなかでも、フランスやスロヴァキア共和国とならんで、もっとも高い率を示している。アメリカでは、すでに70年代から、若年期の不安定な就労状況の人種・民族的差別が指摘されてきたが、90年代にはいって、ニートの割合の年齢毎の推移では、白人に比べて黒人やヒスパニックなどのマイノリティーグループが、不安定就労期で長引き、たとえば、1995年では、27歳になっても、高校中退者では、白人の10.3%にたいして、黒人28.3、ヒスパニック17.7、高校卒業者では、白人、2.2%にたいして、黒人11.3%、ヒスパニック8.6%となっており、収入格差も90年代を通じて拡大している(「アメリカのキャリア教育と就業支援」小杉礼子・堀有喜衣編『キャリア教育と就業支援』劉草書房、2006、53-60)。

ドイツでは、1990年10月3日の東西ドイツ統一後、労働市場は激しい状況が続いており、失業者は1990年代後半には10%を超え、その後も10%前後を示している。そのために、青少年の7割が前期中等学校終了後に定時制職業学校に通学しながら企業での職業訓練を受ける「デュアルシステム」があるにもかかわらず、2003年7月の連邦統計では、ドイツ全体の25歳の失業率は、10.8%で、旧西ドイツ地域では、8.8%であるのにたいして、旧東ドイツ地域では、17.6%とはほぼ倍を示している(坂野慎二「ドイツのキャリア教育と就業支援」小杉礼子・堀有喜衣編、前掲書、117-118)。

3 宮本みち子『若者が『社会的弱者』に転落する』洋泉社新書、2002。

4 単純手作業については、本論文では、具体的に分析されていないが、だれでも五日間で習得できるというのであるから、単純なものである。その中身は、生産ラインに流れてくるケイタイの完成作業を二人で行う作業であろう。一日8時間で、650個を作るというのであるから、1個につき、40-45秒を要する作業である。この作業は軽労働であるが、その形は、フォード主義の形態にすぎない。それに人間手作業を動員しているのは、自動化するよりも、手作業をつかったほうが、はるかに安くあがるということであり、そこには、ケイタイの基本構造につぎつぎと付加価値をつけねばならないという現代的流動性が付加されているとしても、非ポストモダンの労働形態がある。

5 Zygmunt Bauman, *Liquid Modernity*, 2000, Polity Press, ジークムント・バウマン『リキッド・モダニティ』森田典正訳、大月書店、2001。

6 バウマン、前掲書、116参照。バウマンは、「買い物中毒社会」について述べている。

7 Zygmunt Bauman, *In search of Politics*, Polity Press, 1999: ジグムント・バウマン『政治の発見』中道寿一訳、日本経済評論社、2002.263-277。